

【聴楽023】 会津藩の人間教育

小泉吉永

○NHK2014年大河ドラマ「八重の桜」

①山本(新島)八重 *綾瀬はるか 弘化2年(1845)11月3日～昭和7年(1932)6月14日(満86歳)



②新島襄 *オダギリジョー

天保14年(1843)1月14日
～明治23年(1890)1月23日(満46歳)



③山本覚馬 *西島秀俊

文政11年(1828)1月11日
～明治25年(1892)12月28日(満64歳)



④川崎尚之助 *長谷川博己

天保7年(1836)11月
～明治8年(1875)3月20日(満38歳)

- ・従来、根拠もなく「会津から逃げた男」とされてきたが、「八重の桜」でも最初は同様の扱いだった。
- ・その直後、歴史研究家あさくらゆう氏によって北海道立文書館の資料から川崎尚之助の足取りが明らかとなり、斗南藩の飢餓を救うために奔走し、莫大な借金を背負い、裁判後の不遇の謹慎生活中に慢性肺炎で死去したことが判明し、その子孫に辿り着いた。



○知る人ぞ知る「八重の桜」〇×クイズ

1	子供の頃、全ての会津藩男児が学ぶ『日新館童子訓』を学べなかった八重は、10代後半までに独学で身につけ、晩年もすっかり憶えていた。
2	籠城中、子供達は凧揚げ・戦ごっこ・鬼ごっこなどをして無邪気に遊んでいたが、砲弾が飛んでくると、子供達はこそって熱弾 <small>やけどま</small> を拾い集めた。
3	30日間の籠城中に、八重が一番心配したのはトイレだった。
4	鶴ヶ城総攻撃中、八重は、砲弾を受け大腿骨が砕け散った15歳の少年を治療した。この時、激痛に絶えきれず涙を見せた少年に、八重は「見苦しいから泣くな」と諫めた。
5	官軍の鉄砲隊に薙刀で切り込んでいった5人の女性うち、八重の姪(姉の娘)が撃たれて死亡したが、この時、八重は彼女の首を薙刀で切って持ち帰った。
6	書生時代の新島襄は、おかずの干物を猫に奪われ、猫を殺してしまうほど短気だった。
7	京都府知事・榎村正直から「妻は日本人にするのか、外国人にするのか」と尋ねられた時、新島襄は「神の思し召し。どちらでも良い」と答えた。
8	晩年の八重は毎晩、銭湯に通う習慣になっていた。

・八重は**昭和7年(1932)6月14日**に自宅で激動の生涯を終えた(享年87・急性胆嚢炎)。墓は京都市営若王子墓地内同志社墓地の新島襄の隣に建てられた。新島襄の墓碑は**勝海舟**が、八重の墓碑は**徳富蘇峰**が揮毫。

新島襄と八重の墓(「新島」の表記が異なる)



○教育立国・会津藩の教育

①6歳以後のグループ(仕の仲間)教育

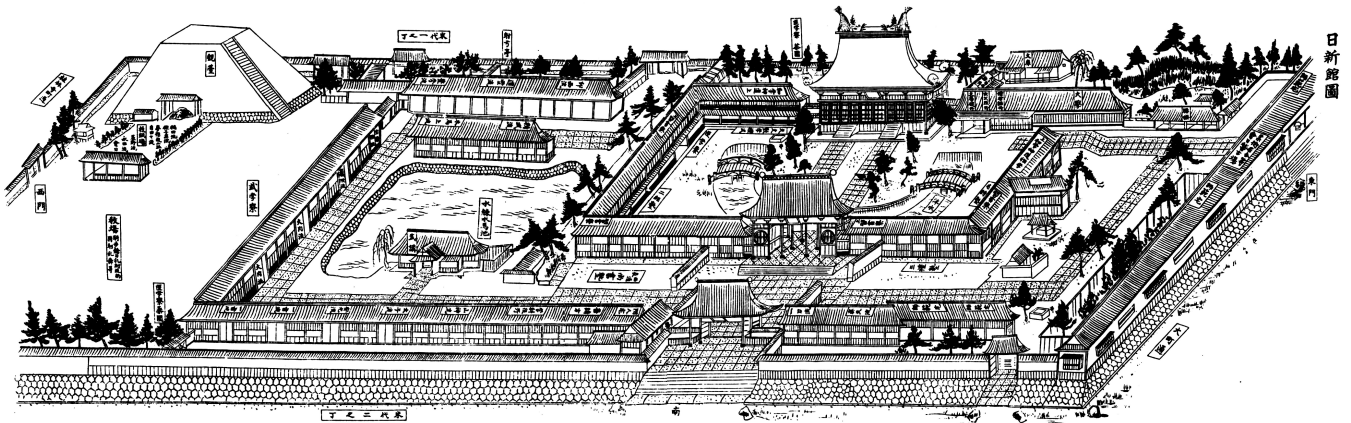
- ・仕長率いる集団生活(お話し・遊び)。
- ・仕の掟(ならぬことはならぬ)による日々の反省。

②10-11歳以後の藩校「日新館」教育 *享和元年(1801)9/29開校

- ・仕長率いる集団生活・集団登校。
- ・多彩な教科。
- ・最古のプール(水練水馬池)。
- ・学校給食など先進的な設備・制度。

③藩独自の道徳教科書『日新館童子訓』*文化元年(1804)4/11発行

- ・5代藩主・松平容頌(かたのぶ)(在職1750-1805)自ら執筆。・藩の要職者・日新館関係者と藩士全員に配布。
- ・日本古今の逸話75話に、儒教の言葉と容頌の解説を添える。→ 75話中19話は、会津藩内の実話。



復元・会津藩校日新館 *総敷地面積3万7924坪(12万5148㎡)



○6歳以後のグループ(什の仲間)教育

・什＝藩校入学前の男児(6-9歳)が所属した地域組織(全9班)。

【什の掟】＊各班で多少の違いがあったが、最後の「ならぬ…」は共通

- 一、年長者の言うことに背いてはなりません。
 - 一、年長者には御辞儀をしなければなりません。
 - 一、虚言(うそ)を言うことはなりません。
 - 一、卑怯な振舞をしてはなりません。
 - 一、弱い者をいじめてはなりません。
 - 一、戸外で物を食べてはなりません。
 - 一、戸外で婦人と言葉を交えてはなりません。
- ならぬことはならぬものです。

【什の罰】

- ①無念……軽い場合。「無念でありました」と言って、みんなに手を突いて詫げる。
- ②竹箆……重い場合。罪の軽重で回数を変えてシッペ(仲良しでも手加減禁止)。
- ③派切り……仲間はずれ・絶交(村八分) → この場合は両親か兄が付き添いで什長に詫げて制裁解除。
- ④手炙り……違反者の手を火鉢の上にかざし、仲間が鼻の脂を違反者の手に付ける。＊例外的
- ⑤雪埋め……雪に押し倒し、雪をかける。＊例外的

○「ならぬことはならぬ」を体現した郡長正こおりながまさ

- ・安政3年(1856)、菅野権兵衛の次男として誕生。＊菅野権兵衛は会津藩家老。戊辰戦争で藩全体の責任をとって切腹。
- ・明治2年(1869)、藩復興のため郡長正ら少年7人が、九州小笠原藩(福岡県みやこ町)の育徳館に留学。
- ・空腹に堪えかね、母へ柿を送って欲しいと頼んだが、母から戒めの手紙。それを支えに頑張った。
- ・手紙を学友に拾われ、仲間の前で読まれてしまったため、その恥をそそぐために切腹(明治4年・16歳)。

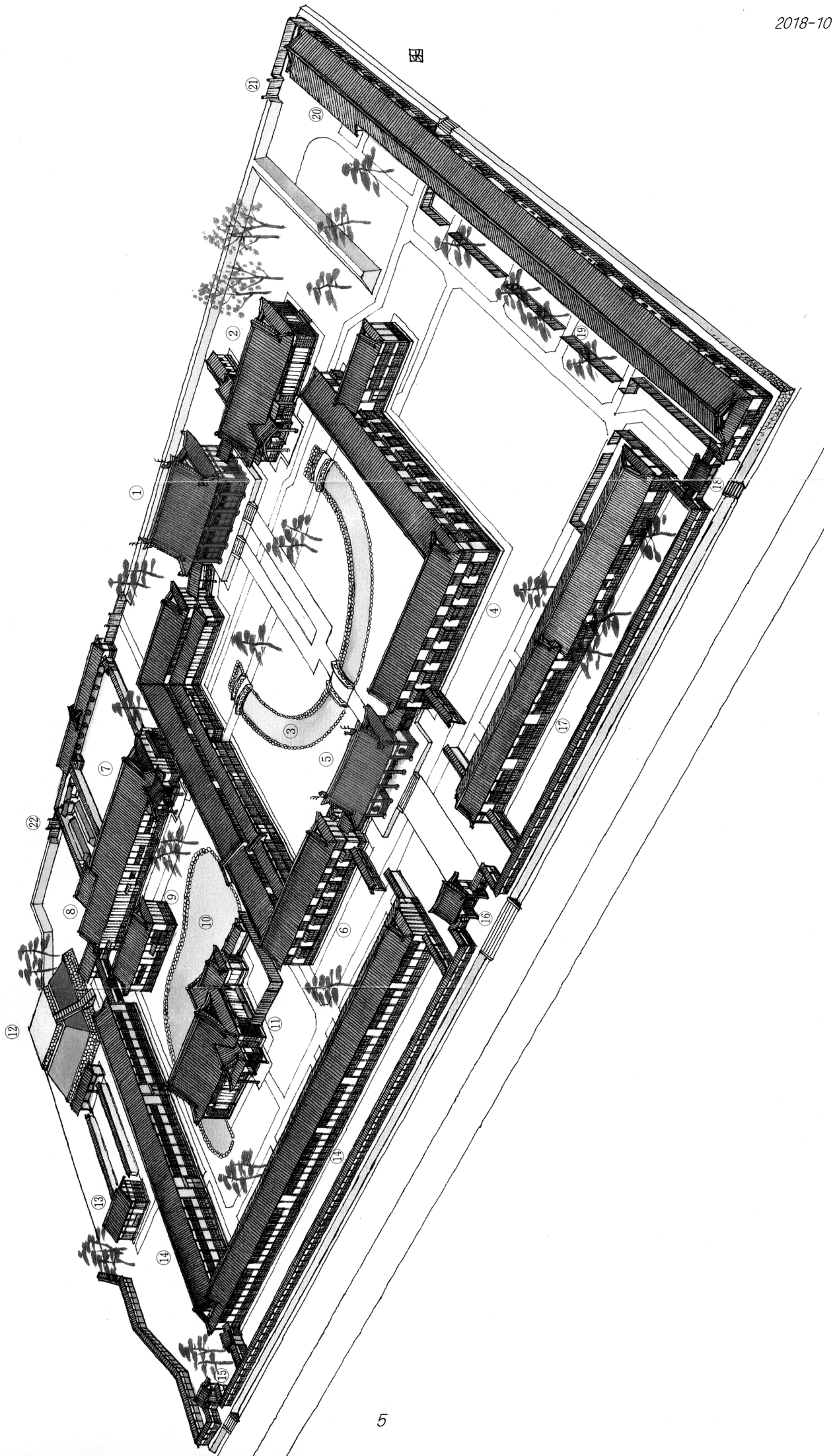


○会津藩校「日新館」

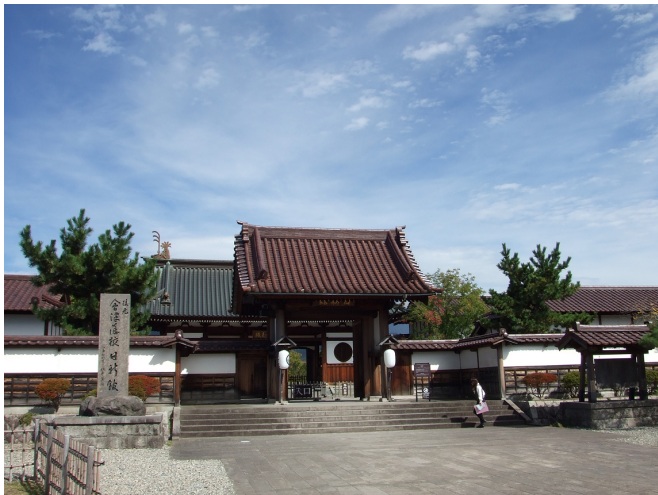
- ・5代藩主・容頌かたのぶの藩家老・田中玄幸はるなかによる藩政改革の一つ。建設資金3000両の殆どを豪商・須田新九郎が負担。今で言う文部官僚から学生まで草鞋履きの土木作業。5年で完成。

○日新館の教育課程

- ①素読所(小学)＝花色組組(はないろひもぐみ)(正規の武士身分)以上が10歳から入学。
 - ・礼法(10-15歳)、書学(13-)、弓・馬・槍・刀(14-)、会読・講釈聴聞(16-＊任意)、兵学等(17-＊任意)などを学ぶ。4等から1等まで。
 - ②講釈所(大学)＝素読所第1等修了者のうち選ばれた者が進学。
 - ・下等から上等まで。優秀な中等生は、江戸(原則昌平黌入学)や諸藩への遊学。優秀者は外国留学も。
 - ③専門学科＝神道、皇学(国学)、和学(歌学)、書学、礼式、茶道、数学、天文、医学、雅学から選択。
 - ④武術科＝弓・馬・槍・刀術は必須、その他は選択。
 - ・砲術、柔術、居合、水練、武講(兵学)、土囷(築城法)
- ＊婦女子は家塾で学んだ。武芸では雑刀術が最も盛んだった。



图



【写真説明】 * <左1>は全頁左列1枚目を示す。

<左1> **南門** * 藩主・上級武士のみが通った正門。生徒は両脇の東西門から。

<左2> **戟門** * 武装した衛兵が立つ門。門内の太鼓で授業の時刻を知らせた。

<左3> **大成殿広場** * 儒学の祖・孔子を祀った建物。唐様造り。

<左4・右1> **東塾** * 10歳から『論語』等の素読を学んだほか、書学(手習い)も重要科目。天文学・気象学・暦学等も学び、礼式(小笠原流ほか諸礼)では切腹・首実検の作法も学んだ。

<右2> **大学(講釈所)** * 素読所後の上級課程を学んだ。現在は適宜講話を行う。

<右3> **大成殿内部** * 儒学の祖・孔子を始め、顔子・曾子・孟子ら

の大理石像を祀る。孔子の鎮座する建物を「神龕」と呼び、最上段の額には「万世師表(孔子は永遠に万人の師である)」と記す。

弓道場(射弓亭) * 日置流弓術を学んだ。

<右4> **水練水馬池** * 日本最古のプール。プールを備えた藩校は他に萩・明倫館のみ。水馬や甲冑での水泳訓練を行った。

武講 * 軍事奉行管轄の兵学研究所。

西武学寮 * 槍の武道場。現在は剣道・空手・合気道などの道場。

北武学寮 * 大坪流馬術等の教場で、最初は木馬で稽古した。

天文台 * 冬至に天体観測を行い会津暦を作成。天文台を備えた藩校は、他に薩摩・造士館、水戸・弘道館のみ。

○会津精神を育んだ『日新館童子訓』(文化元年(1804))

『日新館童子訓』は、会津藩第5代藩主・松平容頌が儒者・神道家達の協力を得て執筆した後、幕臣・屋代弘賢の校訂を経て、老中・松平定信の享和3年(1803)3月の序文と、日新館開校にも関わった熊本藩儒・古屋昔陽(古翫・翫)の享和3年4月の跋文を付して文化元年(1804)4月に刊行、藩の要職者や日新館関係者を始め藩士全員に配られた。

その内容は、『小学』の編集方式にならって日本の「嘉言善行」を集めた修身書で、儒教經典からの引用と容頌の解説を大字で、孝子・忠臣等の逸話を小字で綴る。漢籍からの引用は白文の漢文で難解だが、そのほかは平易な仮名交じり文で、漢字には多くルビを施すため読みやすい。また、全て日本古今の逸話で、上は神・天皇から下は農工商までの75話を集めるが、うち19話は会津藩領の実話である。身近な先人の実例は読者に深い感銘を与え、実践を促したであろう。

上巻冒頭で、「父母これを生じ、君これを養い、師これを教う。父母にあらざれば生ぜず、君にあらざれば長ぜず、師にあらざれば知らず」と三大恩を説き、「これらの大恩に報いることなく、父母に孝なく、兄に悌なく、主君に忠なく、師に敬なく、友に信なき者は、たとえ万巻の書を誦んじ、多能多芸であっても何の役にも立たない」ため、「『幼成天性の如く、習慣自然の如し(幼時の躰は生まれ付きのようになり、習慣は自然と深く染まって本来の性質のようになる)』という言葉のように、日々の行いや主君・父母・師に仕え朋友に交わる際の心得を以下に記した」と本書のねらいを明らかにし、以下、日本の孝道が神代から始まる例証としての天忍補耳尊の孝行や、命がけで主君を諫めた越前松平家の家老・杉田杏岐の逸話などを順々に紹介する。

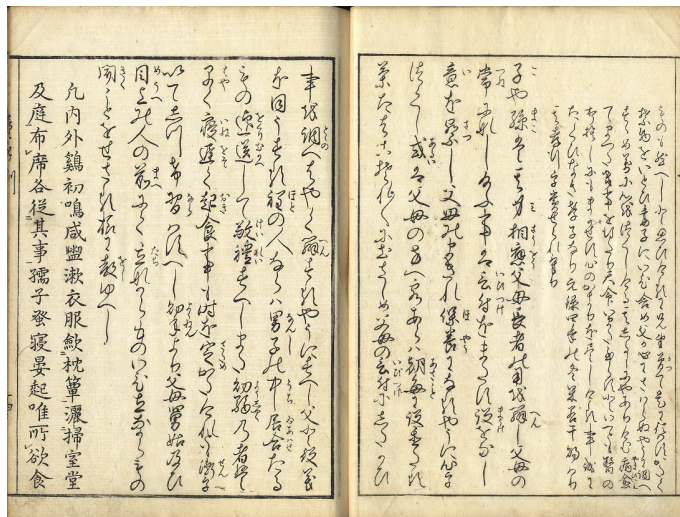
初代藩主・保科正之は、寛文8年(1668)制定『会津藩家訓』15カ条の第1条で「一、大君の儀、一心大切に忠勤を存ずべく、列国の例を以て自ら処るべからず。若し、二心を懐かば、則ち我が子孫に非ず。面々決して従うべからず」、すなわち、会津藩は將軍家の分家として、いかなる場合も諸藩に同調することなく幕府を支えるべきで、万が一、二心を持つ藩主なら我が子孫ではないから、決して従ってはならないと厳命した。容頌が『日新館童子訓』の第67話に『武田信繁家訓』を引いたのも、「たとい海は野となり、野は海となるとも、尽未来際、御屋形(信玄)に対し奉りて二心あるべからず」と兄に絶対の忠誠を誓った第1条が『会津藩家訓』と重なり合ったからに違いない。「ならぬことはならぬ」は、決してブレない土道の起点であり終着点であった。そして、他藩に例のない修身教科書と、幼児から成人まで一貫した独自の教育システムが会津精神を藩内に浸透させた。



【第9話 利三郎・吉十郎兄弟】

・会津大沼郡高田村の親孝行な兄弟。農業と鍛冶屋を兼業していた父が、医者から「もはや治せないから、何でも欲しい物を食べさせよ」と言われ見離された。だが、兄弟は父の看護に励み、食事や調理法にも細心の注意を払って孝養を尽くし、父はついに回復した。藩は元禄4年に米を与え、兄弟の孝行を賞した。*要旨

[容頌曰く] 子や孫は、その立場に応じて父母や年長者の用を務め、父母の常になしたもう事は言いつけを待たずに用意し、意のある所を察し、父母の気分が紛れて保養になるよう心を尽くすべし。あるいは、父母に来客あれば、毎朝用意しておく茶や煙草を出し、父母の言いつけに従って手早く用を済ますべし。来客が父と同じ身分の人であったら、男子のうち居合わせた者が出迎え、見送りをして礼節を尽くすべし。また、幼弱の者は早く寝、遅く起き、食事の時間も一定しないものだが、これについては少しづつ仕付け習わすべし。父母・舅姑及び目上の人の前で、立ったまま物を言ったり、話を聞いたりしてはならないことは、幼年のうちに教えるべし。

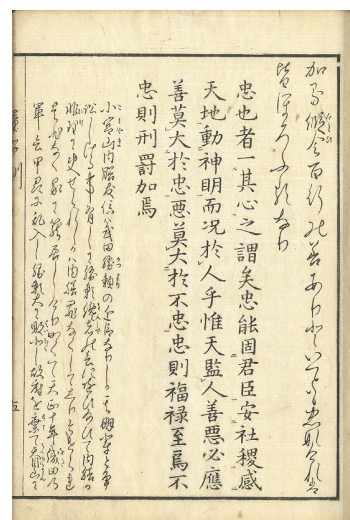


【第49話 小宮山内膳は武士の鑑】

・武田勝頼の近臣・小宮山内膳が同僚とのトラブルで訴訟沙汰になり、讒言を信じた勝頼によって謹慎処分となった。その間、織田信長の軍によって勝頼軍は大敗北を喫し、主従わずかに42人のみとなった。内膳は密かに勝頼の後を追ひ、「自分を捨てた主君のために戦うことは主君の名声にキズを付けることになるが、主君の最期を傍観することはできない」と考え、主君とともに殉じた。後に徳川家康は、内膳の忠義に感じ入り、内膳の子がなかったために小宮山家の祭祀が絶えるのを残念に思い、内膳の弟を重く召し抱えた。*要旨

[容頌曰く] 家臣として最も大事なものは主君を諫めることである。家臣がよく諫め、上がよく聞く時は君道光輝、国家安寧である。諫言は主君の過ちいまだ形に現れざるうちに諫止するを上とす。既に形に現れつつあるも、いまだ行われざるを諫めるは次なり。既に行われたるを諫めるは下なり。いずれにせよ、主君の非を諫めることの出来ぬ者は忠臣にあらず。

それ、諫言は言葉柔らかく上下関係に悖らぬを始とし、面と向かって争い諫めて非を防ぐを中とし、死を以て諫め節に死するを終とし、主君の美德を育てて国家を安んずるを以て目的とするものなり。



【参考『日新館童子訓』の翻字資料】

- ①福島県教育会編『日新館童子訓』（昭和18年3月*抄録）→ 全文を翻字（句読点、濁点を適宜加え読みやすい）。漢文には書き下し文も付記。
- ②佐藤利雄著『会津士道訓 新釈日新館童子訓』（昭和19年6月）→ 会津藩の教育の概要にも触れ、『日新館童子訓』全文の翻字に詳細な語注を付す。
- ③松波節斎著『会津論語』（昭和12年12月）→ 『日新館童子訓』の平易な現代語訳で読みやすいが、全文ではなく抜粋。多くは容頌のまとめの部分が中心で、逸話をしばしば省略する。会津藩祖、保科正之と家訓15カ条も紹介。
- ④土田直鎮訳『日新館童子訓』（昭和59年8月）→ 平易な現代語訳と原文の両方を載せる。語注はなく、跋文の漢文については書き下し文を割愛する。
- ⑤中村彰彦訳『武士道の教科書』（平成18年12月）→ 平易な現代語訳だが、重要な序文を省いたり、現代語訳に意訳を加えていて原文と異なる箇所が少なくない。原文を正しく理解するには他の翻字を参照する必要がある。

○日新館心得「幼年者心得之廉書」(文化2年(1805))

- 其一 毎朝早く起き手あらひ口すすき 櫛^{くしげず}り、衣を正^{ただし}ふして父母の機嫌を伺ひ、年齢に応じ座中を掃除し、客の設け等致すべし。
- 其二 父母および目上の者へ朝夕食事の給仕、茶・煙草の通ひすべし。父母一同に食するならば、父母の箸を取らざる内は食すべからず。故ありて早く食することあらば、其訳を告て早く食すべし。
- 其三 父母および目上のものの出入りには必ず送迎すべし。
- 其四 出る時は父母に見^{まめえ}て暇を乞ひ、行先を告げ、帰る時も同く其旨を告ぐべし。凡て何事も父母に伺ひ、己れ専らになすべからず。
- 其五 父母および目上の人の前にて乍^{たちながら}立物言ひ、乍^{たちながら}立物聞くことをせざるべし。寒けれども手を懐ろにせず、暑けれども扇つかはず、はだぬがず、衣の裾をかかげず、其外、不奇麗のもの父母の見る處に置くべからず。
- 其六 父母および目上の人、事を命じ給はば、謹^{つつし}みて承^{うけたまわ}り、その事を整^{おこた}ひ怠るべからず。己呼び給はば速^{すみやか}に答て走り行くべし。仮初にもその命に違はず、不敬の応声すべからず。
- 其七 父母衣服を重ぬる様に命じ給はば、寒く覺えずとも命に従ふべし。新^{あらた}に衣服を賜はば嗜^{たしな}まざるものにてても慎みて戴くべし。
- 其八 父母の常に居給ふ豊に、仮初にも居るべからず。道の真中は尊者の通る所故、片寄り通るべし。門の闕^{しきい}を踏まず、中央を通るべからず。君門は猶更^{なほさら}のことなり。
- 其九 先生又は父兄と役義を同ふする程の尊者に道に逢ふ時は、路の傍^{かたわら}に控^{ひかえ}て礼をなすべし。行先抔問ふべからず。共に行くとも後れ行くべし。
- 其十 人を誹り人を笑ひ、或は戯^{たわむれ}に高きに登り、深きに臨み、危きことなすべからず。
- 其十一 凡て学習のこと、先づ貌を正しく、己を謙^{へりくだ}り敬て其業を受くべし。
- 其十二 容貌は徳の則^{のり}なりといへば、土庶人屹度分れ見ゆる様に威儀をたしなみ、不敬・不遜の容體無^{これなきよう}之様にすべし。尤も何程懇意^{まじわ}に交るとも、言葉を崩さず、目下のものの挨拶、奴僕と等しからざる様にすべし。言語も他邦に通ぜざる野鄙の言葉は、常に気を附け直すべし。
- 其十三 父母ある時は送^{おく}物の類、私にすべからず。人より送り物ある時は、拝してこれを受け、父母悦^{よろこば}んことをいふべし。凡てこれに準じ、家長を称すべし。
- 其十四 父母の助けとなることは聊^{いささ}か勞を厭はず、まめやかに勤め行ふべし。
- 其十五 尊者我が方^{きた}に来る躰、或は他へ行きたる時、我に上立つ人來らば、其座を立て迎ひ、帰りにも又送るべし。客を得ては、奴僕は勿論、犬猫の類に至るまで叱ることすべからず。尊者の前にて噉^{えつ}息^い(げっ^つぷ^い)し、嚏^{くさめ}(くしゃみ)・欠^{あくび}伸すべからず。凡て退屈の體^{てい}すべからず。
- 其十六 長者何事にてても問ふことあらば、先づ一座の人を顧望して答ふべし。己先立て率爾^{おのれ}に(とつさに)答ふべからず。
- 其十七 酒宴・遊興を樂とすべからず。年若の時別して慎むべきは色欲なり。一生を誤り名を汚すものなれば、幼年の時より男女の別を辨ひ、色欲の咄^{はなし}すべからず。或は戯言^{ざれごと}を以て人の笑を催し、軽浮の貌^{かお}すべからず。争ひは我慢(わがまま)より発するものなれば、常に慎むべし。

*以上17カ条の心得に続けて、次の点を強調。

- ・年齢相応に少しずつ実践させるべきこと(会合毎に下げ札にするなど)。
- ・子供は善にも悪にも移りやすいため、友達づきあいが大切なこと。
- ・幼年は年長者の真似をするので、年長者が模範を示すこと。

○陸軍大将・柴五郎が語る会津藩の教育

・明治33年(1900)の北清事変で義和団との攻防戦で活躍。諸外国から相次いで勲章を授与され、世界にその名を轟かせた。

・明治元年、10歳で日新館に入学。

→ 会津藩の教育を次のように述懐(佐藤利雄著『会津士道訓』)。

…余は入学早々、『童子訓』の教授を受けたりしが、此の『童子訓』こそは余の生涯に重大なる影響を及ぼせる書と言ふべく、屢々朗読する間に多くは其の文句を暗記せり。(中略)

余は戊辰の役に家族の殉難に遭ひ、住み慣れたる邸宅は灰^{かいじん}に歸し、爾来、流離顛沛^{りゅうりてんぱい}(さすらいつまずく)、給仕となり、書生となり、食客となりて具さに人生の苦楚^{くそ}を嘗むるに到りしが、然も善^{しか}く不善^{ずなわ}・墮落の道に踏入る事なく、大過なく今日あるを得たるは、一に藩教育の賜^{たまもの}に外ならざるなり。即ち六歳より施されたる「ならぬことはならぬ」藩独特の訓育・錬成と、其の取扱ひに於ても鄭重^{ていじゆう}を極めたる『童子訓』によりて、忠信孝悌の大道を教へられたる結果なり。実に『童子訓』は、会津藩政時代、会津学生が各々其の一生涯を通じて最も深き感化・影響を受けたる書にして、彼の白虎隊士の如きも皆、本書によりて「戦陣に勇なきは孝^{あら}に非ず」と、烈々火の如き士魂^{しこん}を鼓吹せられたるものなる事を知らざる可からず。



氏 郎 五 柴 佐 中 兵 砲 軍 陸

* 本書跋文で佐藤は、『日新館童子訓』が「全会津人の中心教典となつた書」と述べ、後の東京帝国大学総長となつた山川健次郎や、『旧夢会津白虎隊』の著者・永岡清治など、明治に生きながらえた旧会津藩士の誰もが『日新館童子訓』が精神的な支えになったことを記す。

○日本最高水準の教育が行われた会津藩

・幕末諸藩の教育は、会津藩校「日新館」と佐賀藩校「弘道館」が東西の双壁とも言われる。

・弘化3年～慶応元年(1846～65)の20年間に、昌平黌の書生寮に入寮した出身藩別人数は次の通り。

第1位	佐賀藩	35万7000石	40人
第2位	仙台藩	62万石	21人
第2位	薩摩藩	77万石	21人
第4位	会津藩	23万石	19人

【参考文献】 早乙女貢『会津藩校日新館と白虎隊』(新人物往来社)